

研究主題「友達と協同する中で、自分の目標をつくり出し達成しようとする 力の育成 - 観点を明らかにした評価とその指導の工夫を通して - 」

東京都教職員研修センター 研修部教育開発課
千代田区立九段幼稚園 教諭 中村千絵

研究のねらい

幼児が人とのかかわりを深め、主体的に活動していくには、目的をもち友達と協同して行う協同する遊びの経験が大切であり、幼稚園教育要領(平成 10 年)にも「幼児の主体的な活動は、他の幼児とのかかわりの中で深まり、豊かになる(後略)」とある。このことについては、中央教育審議会答申「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」(平成 17 年)で、主に 5 歳児を対象として、発達や学びの連続性を踏まえた幼児教育の充実のために「協同的な活動」の取り組みを推奨する必要があると述べている。一方、東京都教育委員会の教育目標(平成 19 年度)では「自ら学び考え行動する」子供の育成に向けた教育を重視している。自ら学び行動する力を培うためには、幼児が友達と協同しつつ、目的をもって主体的に遊びに取り組む経験が大切であり、協同性をはぐくむ指導が大切であると考えます。

よって、本研究では、目指す幼児像を、友達と協同する遊びの中で、自分の目標をつくり出し達成しようとする幼児とし、協同性をはぐくむ指導の在り方を明らかにする。そのために、教師が協同性をはぐくむ観点を明確にして幼児の行動を評価し、この評価結果に基づいた適切な指導ができるよう、効果的な評価と指導方法について開発する。

研究の内容と方法

1 研究の仮説

協同性をはぐくむ指導過程において、教師が幼児の行動について観点を明確にして評価し、評価の結果に基づいて適切な指導を行うことにより、協同する遊びの中で、幼児の自分で目標をつくり出し達成しようとする力を高めることができる。

2 基礎研究

先行文献の分析から、本研究における協同及び協同性については以下の通り定義する。

協同とは、仲間と役割を分担したり、協力したりして目的に向かうことであり、友達と協同しようとする幼児の心情、意欲及び態度を協同性とする。

3 観察法による事例分析

(1) 方法

5 歳児学級において、観察対象児 2 名を中心に 6 月から 9 月にかけて継続して週 2 回の観察を行い、「友達と協同する中で、自分の目標をつくり出し達成しようとする力」を育てるために幼児にとって有効な経験と教師の指導の在り方について分析を行った。

(2) 結果

観察法による事例分析から、協同する遊びにおいて幼児が経験している内容を「内面からのつながり」「受容的な向かい合い」「友達との葛藤とその解決」「目的の共有化」「目的への主体的な取り組み」の五つととらえた。この経験内容を幼児の行動について評価する観点とし、協同性をはぐくむための指導過程における幼児の評価の項目を作成した。

4 検証保育

(1) 方法

本研究の仮説を検証するため、5歳児学級において10月に10日間の検証保育を行った。

(2) 分析及び考察

他学年の幼児が楽しめる題材を考えて誕生会で見せることを目的として、幼児がグループで内容や方法を話し合い、必要な道具を製作し練習するなどの活動を行った。この指導過程における幼児の経験内容と教師の指導との関係を五つの観点により、<表1>のように分析した。

<表1> 協同性の質の高まりと教師の指導

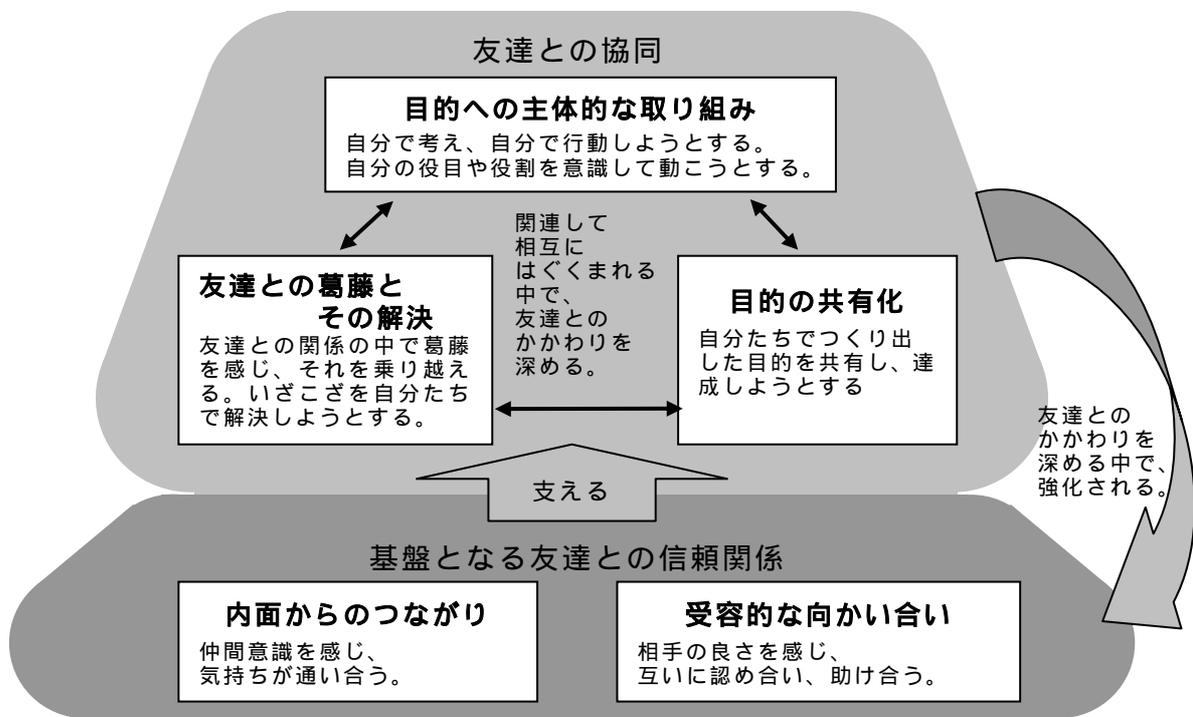
		活動初日	活動最終日
内面からのつながり	幼児の行動	幼児の活動の基盤にあり、活動を支え続ける。	
	教師の指導	互いに近くに座って話をする。	自分たちで集まり、互いの顔を見ながら話し合いをする。
受容的な向かい合い	幼児の行動	友達の考えを聞く。	自分の作った物に自信がもてないことで、友達の作品を認められない。
	教師の指導	落ち着いて話せるように、それぞれのグループが集まれる場所を保障する。	自分たちで集まり、話し合いをすすめている姿を認め、その価値を言葉で伝える。
友達との葛藤とその解決	幼児の行動	自分の考えが明確になることで、相手との違いに気づき葛藤が起こる。	
	教師の指導	教師が幼児の考えを認める姿を見せ、向かい合うことのモデルとなる行動をする。友達の考えを受け入れる姿を認める。	自分の作品や考えに自信がもてるよう、具体的にその良さを認める。相手の作品や考えをまず認め、受け入れることの大切さを知らせる。
目的の共有化	幼児の行動	活動を進める中で、目的の内容が深まる。	
	教師の指導	グループで行うということが分かり、話し合い、練習する。	3歳児に見せるということを意識し、見せ方を工夫する。
目的への主体的な取り組み	幼児の行動	グループの中での自分の役割が明確になり、意欲が高まる、	
	教師の指導	特定の幼児のみが目的に向かうための考えを出す。	それぞれが自分の考えを出し、目的に向かうための自分の行動が分かって活動する。

幼児は、活動の中で、友達と一緒に過ごす心地よさと共感する喜びを感じている。友達との内面からのつながりや受容的な向かい合いは、相手に受け入れられない悔しさやもどかしさなど多様な感情体験をすることにより、より質が高まり、信頼関係につながる。友達と目的に向かい話し合う中で、活動の方向性を見いだす。目的が明確になることで、相手と自分の考えに気付き、友達との葛藤になる。葛藤した状態から、教師の指導の下で互いに譲り合って解決策を見付ける。教師が継続して指導し、幼児の目的意識が高まっていくことで、幼児は、互いに歩み寄り友達との葛藤を主体的に解決しようとするようになる。教師が個々の幼児の役割や目標を確認する指導を繰り返すことで、幼児自身が自分の中で役割を意識して行動するようになる。

以上のように、五つの経験内容を評価の観点とし、指導することにより、このグループの協同性の質が高まり、友達とのかかわりが深まっていった。友達とのかかわりを深める中で、幼児は意欲をもって主体的に自分の目標を設定し、活動できるようになった。

研究の結果及び考察

1 協同する遊びにおける幼児の経験内容の構造化



< 図 > 協同する遊びにおける幼児の経験内容

協同は、友達との信頼関係が基盤となり、それに支えられることで可能になる。友達との信頼関係を築くには、友達と一緒にいて心地よいと感じる内面からの気持ちのつながりと、友達との考えの相違や違和感も受け入れながら、相手を受容的に認める気持ちの両面が必要である。信頼関係を基盤にして、友達と意見の相違から葛藤を経験し、互いに譲り合い、解決方法を探りながら、活動の目的を共有化する。また、目的を共有化することで、意見の相違や葛藤が生じる。このような友達との相互のかかわりから、幼児は自己の役割を明確にし、自己の目標をつくり出して、目的に対して主体的な取り組みができるようになる。さらに、主体的な取り組みが新たな友達との葛藤やグループの目的をより良いものにしようとする動き、目的の共有化につながる。協同する遊びを通して友達とのかかわりを深めることにより、友達との信頼関係を強化し、互いに必要な存在であることを認め合う一人一人を生かした集団を形成していく。

2 協同性をはぐくむ指導過程における評価の項目の例示

幼児の経験内容から、幼児の評価の観点と評価の項目例を開発し、<表2>に示した。この観点による評価の結果から、指導の方向性を定め、効果的な指導を行うための基礎とする。

<表2> 協同性をはぐくむ指導過程における幼児の評価の項目例

評価の観点	評価の項目例
1 内面からのつながり < 仲間意識を感じ、気持ちが通い合う。 >	<ul style="list-style-type: none"> ・無意識的に声や体の動きがそろう、同じ動きをすることを楽しむ。 ・楽しんで互いに言葉を交わす。 ・友達がしていることを自然に援助する。
2 受容的な向かい合い < 相手の良さを感じ、互いに認め合い助け合う。 >	<ul style="list-style-type: none"> ・相手に分かるように、自分の思ったことを伝えようとする。 ・自分と異なる友達の行動や意見を理解しようとする。 ・他者の気持ちを理解した上で思いやりのある行動をとろうとする。 ・友達が頑張っている姿を見て応援する。 ・自分が困ったときに友達に助けを求めることができる。 ・友達が困っているときに相手の気持ちを考えて援助しようとする。
3 友達との葛藤とその解決 < 友達との関係の中で葛藤を感じ、それを乗り越える。いざこざを自分たちで解決しようとする。 >	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の感情や欲求を抑える。 ・自分の欲求と相手の欲求に折り合いをつけようとする。 ・友達の言葉を真剣に聴く。 ・よりよい方向性のために、友達と違う考えを出す。 ・友達同士のいざこざに介入し、関係を調整しようとする。
4 目的の共有化 < 目的を自分たちでつくり出し共有する。 >	<ul style="list-style-type: none"> ・目的を意識し、友達と一緒に物事をやりとげようとする。 ・遊びの目的やイメージ、ルールなどを言葉や行動で確認し合う。 ・遊びの目的やイメージ、ルール、方向性などを話し合いで調整して、決めようとする。 ・遊びの過程で、目的を意識しながら、満足感や達成感を味わうことができる。 ・短期の見通しをもって行動しようとする。 ・数日又は1週間程度の長期の見通しをもって行動しようとする。
5 目的への主体的な取り組み < 自分で考え、自分で行動しようとする。自分の役目や役割を意識して動くこととする。 >	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えを主張し、相手に拒否されたり、受け入れられたりする経験をする。 ・自分の役目や役割を考えようとする。 ・自分の考えた役目や役割に沿って、遊びを進めていこうとする。 ・友達の動きを意識して、自分の行動を考える。 ・学級やグループの目的を意識して、自分のやるべきことを見付ける。 ・自分の目標に向かって、試し、工夫する。

3 考察

(1) 協同する遊びにおける幼児の経験内容を構造化したことにより、協同性をはぐくむために必要な指導の方向性が明確になった。友達との協同は、互いの信頼関係が基盤となり成立する。友達と協同して遊ぶ中で、目的を共有する必要性が出てくるため、幼児は、友達との考えの違いを認識し、相手との葛藤を感じる。このことで、互いの信頼関係が揺らぐ。しかし、教師が評価の観点を基に、幼児に必要な経験内容を考えて指導することで、幼児は友達との葛藤を経て互いの信頼関係を深め、協同する中で主体的に活動することができるようになる。

(2) 協同性をはぐくむ指導過程において、幼児の経験内容に着目し、観点を明確にして、評価と指導を行うことで、幼児は仲間と協力し、その中で自分の目標をもち活動するようになる。観点を明確にすることで、教師は幼児の経験内容を的確に把握することができ、指導の方向性が明確になる。ただし、協同性は幼児の発達の中で総合的にはぐくまれることから、この観点以外の視点からも幼児の行動を観察し、個々の幼児の発達課題に即したねらいをもって適切な指導を行っていく必要がある。

今後の課題

今後は、小学校との円滑な接続を視野に入れ、就学前における協同する経験について研究を深めていく必要がある。学級の課題を踏まえた上で自分の目標をつくり出し達成することは、学びへの主体的な取り組みであり、教科等の学習を中心とする小学校以降の教育の基礎となる。さらに、幼児期において、友達と協同する中で自分の目標をつくり出し達成しようとする力を培うことは、小学校以降の生活や学習につながっていくものであると考える。